

幼児教育の専門性を育む

—幼児教育を深める幼稚園教諭・保育士育成の授業の考察—

Bringing up speciality of early childhood education:
Consideration for the class of nurturing childminders' upbringing

久米 裕紀子, 中山 律子, 脇田 栄, 村岡 節子
坂本 美佐子, 金光 文代, 両角 妙

KUME, Yukiko NAKAYAMA, Ritsuko WAKITA, Ei MURAOKA, Setsuko
SAKAMOTO, Misako KANEMITSU, Fumiyo MOROZUMI, Tae

武庫川女子大学 学校教育センター紀要

第5号 2020年

幼児教育の専門性を育む
—幼児教育を深める幼稚園教諭・保育士育成の授業の考察—

Bringing up speciality of early childhood education :
Consideration for the class of nurturing childminders' upbringing

久米 裕紀子* 中山 律子** 脇田 栄** 村岡 節子**
坂本 美佐子** 金光 文代** 両角 妙**

KUME, Yukiko* NAKAYAMA, Ritsuko** WAKITA, Ei** MURAOKA, Setsuko**
SAKAMOTO, Misako** KANEMITSU, Fumiyo** MOROZUMI, Tae**

要旨

平成30年度より幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育所保育指針の改正を受けて施行され、今年度で実践が2年目を迎えた。文部科学省は、幼稚園教育要領の改正を踏まえ、「幼児理解に基づいた評価」を刊行し、幼稚園の教師が一人一人の幼児を理解し、適切な評価に基づいて保育を改善していくための基本的な考え方や方法などについて解説している。その中で、幼児理解からの出発として、幼児期にふさわしい教育を行う際にまず必要なことは、一人一人の幼児に対する理解を深めることである。幼稚園における保育とは、本来、一人一人の幼児が教師や多くの幼児たちとの集団生活の中で、周囲の環境と関わり、発達に必要な経験を自ら得ていけるように援助する営みである。そのためには、教師は幼児と生活を共にしながら、その幼児が今、何に興味をもっているのか、何を実現しようとしているのか、何を感じているのかなどを捉え続けていかなければならない。幼児が発達に必要な経験を得るための環境の構成や教師の関わり方も幼児を理解することによって、初めて適切なものとなる。すなわち、幼児を理解することが保育の出発点となり、そこから、一人一人の幼児の発達を着実に促す保育が生み出されてくる。この研究の主旨は、学生を対象にした授業の効果検証である。

キーワード：幼児理解 保育 専門性 共有

1. 研究の目的

幼児理解が保育の出発ということ踏まえ、まず、学生が幼児理解をどう受け止めているのかを探っていくことから始めた。そして、本学の保育者養成課程の中で、幼児理解について学生が理解を深めるために、どのように授業を展開していくのかを各授業担当教員が互いに連携を取り合い、協議していくことを目的とする。

この実践報告では、それぞれの担当者が授業での取り組み、成果と課題を共有し、それぞれの授業を省察しながら、学生の幼児理解につながることをめざして共有していく。

この研究は、本学短期大学部幼児教育委学科（以下、短教）1年前期「保育者論」「保育指導法」、短教2年前期「保育内容・表現Ⅱ」、教育学部教育学科（以下、新教）1年前期「保育者論」、文学部教育学科（以下、大教）3年前期「保育内容・環境」、短教1年後期「保育内容・健康」の授業担当教員が行う。同じ学年のクラスを2クラスずつ担当する教員もいる。担当教員は、全て幼稚園の園長経験者である。

* 教育学科講師 ** 教育学科非常勤講師

2. 幼児理解に対しての学生の意識

幼児教育は、幼児理解が出発であるということを踏まえ、学生たちが幼児理解をどのように捉えているのかというアンケート調査(短教1年生)を行った。学生全てにアンケートを取ることが難しく、入学した短教1年生の実態から、検討し、その結果をそれぞれの銃魚で活かし、共有していくことを確認した。

(1) アンケート調査

1) アンケートの内容

内容:はじめに幼児理解が保育者にとって必要なことだと思うかを確認し、アンケートを配布した。

【記述式】問1. 幼児理解について、問2. めざす保育者像について、知っていること、分かっていること、自由形式で記述する。

2) 対象: 短教1年生 126名

時期: 令和元年5月～6月 保育者論の授業にて

3) 回収率: 97.6% 回収 123名 (欠席3名)

4) 結果

幼児理解は保育者にとって必要だと思うかという問いには、全員が必要だと思っている。必要だと思っていない、分からないという学生はいなかった。

① 幼児理解について

幼児理解は保育者には必要だと思っはいる。幼児理解については、具体的にどうということなのかを記すことに困惑している様子であった。分からないなりに考えて書く姿も見られ、ある程度の時間が必要であった。その内容を担当教員者で、分からない、少し分かっている、分かっている、とても分かっているに判別し(図1)に記す。とても分かっている、分かっているという学生はいない。分かりません、分からないので学びたいと正直に記す学生がほとんどであった。

② めざす保育者像について

学生たちは、幼児理解に関しては、必要なものという認識は持っている。幼児理解の内容や理由はつかめていないが、めざす保育者像はしっかりと描いている学生が多かった。その中から抜粋したものを以下に記す。

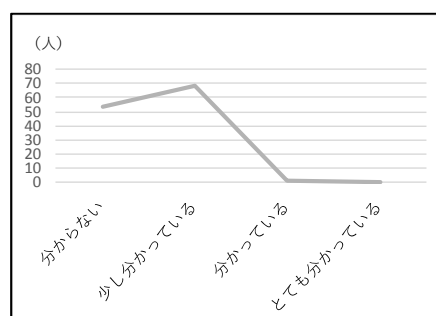


図1 幼児理解をどのようにうけとめているのか

表1 学生がめざす保育者像

・ 一人一人に寄り添う。いつも笑顔で温かい先生。自分の考えを押し付けるのではなく、子どもたちを理解して尊重できる先生。遊びをたくさん知っている先生。
・ 子どもの意見に耳を傾け、広い視野を持った思いやりのある保育者。臨機応変に様々なことに対応でき、いろんなことに自らチャレンジできる保育者。
・ 私は保護者との関わりを1番大切にしたいと思っているので、保護者からも相談されるような優しくてしっかりした頼られる(この人に頼ってもいい)と思える保育者。
・ 自分の価値観や人生観を子どもに押し付けずに、子ども一人一人をきちんと理解できる保育者。子どもが生き生きと活動できるような環境を整えてあげられる保育者になりたい。
・ 子ども一人一人に向き合い、その子に合った言葉がけや援助をできる保育者。
・ 子ども一人一人と向き合い子どもたちのために努力できる保育者。
・ 一人一人と丁寧に向き合い子どもがのびのびと成長できる保育ができる。良いところを伸ばしてあげられる。
・ 子ども一人一人としっかり向き合い成長と一緒に喜ぶことができる保育者。子どもたちが毎日くることが楽しいと思えるような環境を作りたい。

(2) 結果

アンケートは入学間もない学生を対象にしたが、保育者にとって幼児理解が大切である、必要であると思っていることが分かった。しかし、幼児理解の受け止めは、まだ、分からない、何となくこんなこと、もっと学ばなければいけないという意識をもっている。そして、めざす保育者像を自分なりにしっかりと描いている学生が多かった。学生は、幼児理解を学んでいったという姿勢が感じられた。この結果は、幼児教育の道を目指す学生には、共通であることを担当教員が確認し、それぞれの授業の中で学生が幼児理解につながる授業展開を目指していくことになった。このことを、担当教員が共有し、学生の前向きな気持ちをしっかりと受け止め、授業を展開していくよう努めていく。

(3) 幼児理解につながる授業展開をめざして

アンケートの結果を踏まえ、担当教員が授業について協議し、学生たちに育てたい力として保育者としての探求力、向上心、幼児理解の大切さであることを改めて共有し確認した。子どもの気持ちに寄り添うためには、謙虚さ、精いっぱい心に傾ける温かさが必要である。各授業担当教員が、学生に真摯に向かい合い、保育の手ごたえを伝えていくことの重要性と、授業の情報を共有していく研究協議の機会をもっていくようにした。

3. 「保育者論」の授業を通して

(1) 授業の意義

幼児理解の基礎になる知識として、「幼児期の特徴」や「発達に関する知識」を身に付けておくことが大切である。保育における幼児理解は、保育者は、保育するにあたってまず幼児理解を行う。一人一人の子どもをよく観察し、その子どもの興味や関心を知り、なぜその遊びに興味を持つのか内面を理解しようとする。「保育者の幼児を理解する力」は、保育の方法の出発点として位置付けることができる。まず、幼児を理解し、どのように保育をしていくかを計画し、実践する。幼児理解を生かした環境構成をし、子どもに応じた援助を行う。そして、保育を振り返り、今後の保育を改善していき、保育を省察する。つまり、PDCA サイクルである。

この「幼児を理解する」「幼児理解に沿って保育を計画する」「計画に沿って保育を実践する」「実践した保育を省察する」というこの4つの段階を行うことで、保育者の力量を高め、幼児の活動を豊かにし、保育の質を高める専門性を育むことになる。この出発点となるのが幼児理解である。

(2) 授業の内容

「幼児期の特徴」「発達に関する知識」は、0歳から5歳の発達と特徴、それぞれの年齢の乳幼児に対する保育者のかかわりについて講義を行った。また、具体的に3歳児から5歳児の遊びと仲間との関わりで起きたトラブルと保育者の援助について、写真を用いて話をした。

「保育者の職務内容と職員間の連携」の授業では、保育者が実際にどのように幼児理解をし、それを確かなものにしてしているのか、保育カンファレンスの事例を通して話をし、保育を行う上での幼児理解の方法について知らせた。

私たちが担当している「保育者論」の授業は、教育学部1年生、短期大学部1年生が受けている授業である。新教の学生は、将来小学校教諭や中学校教諭、幼稚園教諭、保育士、企業に就職を希望している。短教の学生は、保育士、幼稚園教諭をめざしている。この授業開講は前期であり、短教、新教の学生はまだ実習経験がない。知識として幼児期の特徴や発達を学んでも、実際の幼児を見る機会がないため、知識が実際の幼児の姿と結びつきにくい。また、学びがすぐに生かされるわけではないので、知識を確かなものにするのができない。そこで、授業の中にDVDを見る機会を入れること

にした。DVD を視聴後、幼児の姿、教師の援助についてレポートにまとめさせた。

(3) DVD の視聴より (※DVD「乳幼児の発達と保育」VOL.3 3歳児・4歳児・5歳児 原案監修 大橋喜美子)

短教、新教も「保育者論」は、主に保育士に焦点をおいた授業をする担当者と幼稚園教諭に焦点をおいた授業をする教員二人で授業を分担している。本研究者は、主に幼稚園教諭に焦点を当てた授業を行っているため、主に3歳児から5歳児の姿のDVDを見せることにした。

DVDは、「乳幼児の発達と保育～心とからだを育てるあそびの環境～3歳児・4歳児・5歳」で、幼稚園児の年齢の3歳児、4歳児、5歳児の姿を1回ずつに分けて視聴させ、年齢ごとにまとめて、3枚のレポートを授業の最後に提出させた。内容は以下の表に記す。

表2 DVDを視聴してレポートした内容について

<p>実習に行ったことのない学生が、DVDの乳幼児の姿を見て、実際の子どもの姿を理解することを助けるものとして、次のような姿を手掛かりにしていたことが分かった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の幼い頃のことを母親から聞いて、あるいは自分の記憶により思い出した自分の幼い頃の姿 ・自分の弟や妹、いとこの小さい頃の姿 ・高校生の際に、トライアルウィークで保育施設に行った時の子どもの姿 ・大学に入ってボランティアに参加した時の子どもの姿
<p>DVDを見ることによって、「幼児理解」ができて良かったと感じた内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼児理解で終わるのではなく、幼児理解をした上で、保育者の援助や環境構成をすることの大切さに気付けた。 ・「子どもの発達」の授業内容とDVDで見た幼児の姿が一致して、より授業の内容が理解できた。 ・3、4、5歳の発達を比較して理解しやすい。また、5歳児の発達が次の小学校生活へつながっていくことが、よく理解できた。 ・自分が保育者になった時にどのような保育をしたいか、イメージがわかりやすい。 ・小学校、中学校の先生になりたいと思っていた生徒がDVDの幼児の姿を見て、幼児の素直さ可愛さを感じ、「幼児理解」の大切さを知ることができた。 ・就学前の子どもについて学ぶことで、また小学生に入るまでの姿を知ることで、小学生のことをより理解できると感じた。(将来小学校の先生になりたい生徒) ・乳幼児の接し方が分からなかったが、DVDを見て少しわかったような気持ちになった。

(4) 成果と課題

講義で「幼児期の特徴」や「発達に関する知識」を取り上げた。レポートの内容から、それぞれの学生がどのようなことを感じたかがうかがえた。学生が自分以外のいろいろな考えに気付くには、DVDの視聴後にグループで話し合いをもたせ、DVD視聴後に書いたレポートを読んだ上で、感じた問題点を整理し、まとめた内容を知らせる授業をする等の工夫が必要である。

4. 保育内容・環境の授業を通して

(1) 授業の意義

保育内容・環境を学ぶことはいずれ学生が専門性をもった保育者として就労するという、前向きなイメージをもちながら意欲や目標を育てる点で、意義も大きい。幼児教育は環境による教育といわれている。より具現化した「環境」を学ぶ中で、主体的に授業に参加し授業内容への理解が深まるのではないかと考える。



写真1 授業風景

(2) 授業の内容

この授業の担当教員2名で、内容を協議し、以下のように進めることとした。

表3 授業の内容

第1回	保育内容「環境」：幼稚園教育要領における環境とは何か、環境の意義について考える
第2回	「環境」と幼児理解：好奇心、探求心とは ・好奇心、探求心を育てるにはについて実践事例を見る ・ペーパーサート作り(※1)と使って展開できる遊びの紹介
第3回	「環境」と幼児理解：時間・空間の認識について ・自主性、主体性とは何かについてワークショップをする
第4回	好奇心・探求心を育てる指導：好奇心・探求心を育てる指導について指導案をグループで立案する ・「風を感じるには」という課題での保育指導の立案について ・どんな遊びや活動が子どもの好奇心や探求心を育てる芽になるか考える
第5回	思考力の芽生えを育む指導について ・教材演習「かざぐるま」の制作
第6回	人的環境としての友だち・保育者の保育的特性について ・実践から学ぶ 写真を見て保育者の教材準備・配慮・友だちとの関わり等から環境構成を見る
第7回	物的環境としての園具・遊具・素材(1) 生活デザインの基本 ・DVDを観てグループでのワークショップを行う
第8回	園内環境としての園具・遊具・素材(2) 園具・遊具・素材の特性と配慮事項 ・内容についてグループでまとめる ・「梅雨期」の遊びや歌の紹介
第9回	自然環境について(1) 動植物との関わりから育つもの(2) 自然を感じとる力 ・人的環境・物的環境・自然環境・情報環境・地域環境・安全環境について発表をし、グループの発表での気づきを話し合う
第10回	日常生活の中での興味や関心(1) 生き物の生態・自然の性質 ・園内外の自然を生かした保育実践のビデオなどを視聴する
第11回	日常生活の中での興味や関心(2) 指導案の作成 ・9月中旬の実習時期に合わせた指導案の考え方や作成のポイントについて(※2)
第12回	・地域とのかかわりや保護者参加の行事などの紹介やビデオを観
第13回	「環境」から見た道徳性の芽生えを培う指導について ・「秋」をテーマにした歌の紹介と指導方法と、教材作りについて(※3)
第14回	乳幼児期の安全環境について
第15回	実践的課題とまとめと折り紙(いがぐり)、絵本の読み聞かせについての演習

シラバス到達目標(2) 幼児の発達や学びの過程を理解し、領域環境にかかわる具体的な指導場面を想定した保育を構成する方法を身につけるために、授業内容の中から以下のこと着眼した

- 幼児が周囲の様々な環境に好奇心探究心を持ってかかわり、それらを生活に取り入れようとする力を知り乳幼児期の発達など特性をとらえる。
 - 環境構成に必要な理論と実践を通しての幼児教育の現場にいかせるように工夫する。
- 主にこの2点の着眼点について報告する。

(3) 授業の着眼点

- ① 1点目に、まずは、環境というものの意義を理解した上で、環境と幼児理解、人的・物的環境の認識等と時間・空間の認識等について。また、好奇心探究心を育てることや人的環境としての友達・保育者の保育的な特性、保育者としての大切な役割から幼児の姿を知る。

教科書での理論の抑えをしながら、並行して、DVDで現場の実践の保育者・幼児の様子と様々な環境など視聴してグループワーク、まとめ、全体交流、発表の場面を通しての事例と幼児の発

達を理解する上で一人ずつ指導案の作成をして、添削した指導案を資料として配布し、更に幼児の年齢別発達によって異なることに気付く。(DVD題名 保育内容環境 子どもの「やりたい」に応じる環境)

例Ⅰ：「保育内容環境にかかわる現場の様子」のDVDを視聴して・・・5月23日と30日
グループごとにタイトルを決め各環境から選択をしてまとめる。・・・6月6日と27日
全体交流各グループ発表，質疑応答。・・・7月4日
学生たちの発表を踏まえながら，保育環境として大切な事，保育者としての役割等，保育者の援助や環境の構成を資料にまとめ配布して講義した。次のような内容である。

保育環境のまとめ

7月18日

各グループがDVDを視聴した後，感想を切り口にしてそれぞれの視点からまとめ発表をして，全体交流をした。物的環境，自然環境，人的環境，地域環境，情報環境，安全環境の中で保育環境として大切な事，保育者としての役割等保育者の援助や環境の構成の発表を踏まえてまとめた。

- ・ 幼児は園生活を通して身近な人，身近な出来事，身近な自然，物，事象，文字や記号，地域，文化に出会って興味関心をもったり，楽しんだり，考えたりして感情や感覚を豊かにしている。
- ・ 環境は，幼児がどのような環境にかかわって活動を生み出していくか，季節や状況に応じて保育者がどのような環境を用意するのかが，大きなポイントとなる。
- ・ 幼児と環境の関わり，幼児一人一人の育ちの理解，保育環境の具体的なデザインの方法，保育者の柔軟で適切な援助のあり方が，DVDから，また全体交流の場で明らかになってきた
- ・ 幼児教育の基本的な考え方や環境の意義や幼児理解，他の領域での関連性や関係性。
- ・ 幼児の発達の観点から，環境の持つ意味や幼児との関わりについて。
- ・ 幼児が身近な自然に出会い，親しみながら対象物への興味をもち，関わりを深めていく
- ・ 園のものや道具に触れて，発見や試行錯誤を繰り返し，考え工夫して遊びを充実させていく。
- ・ 日常生活の中で文字や数，図形や記号等に接して関心をもち，それらを遊びや生活に取り入れて，人や物との関わりを広げていく。
- ・ 身の回りの情報に触れて，遊びや生活の中で活用したり，様々な人々や施設，行事や文化に接して地域や日本の文化に親しみ，異なる文化にも気付いたりしていく。

◎ 追加(自主課題)：環境をめぐる現代的課題も考える。

急速な社会の変化にともなって，幼児の取り巻く環境は大きく少しの間で変化している。身近な自然や遊び場，直接体験の場面，子供同士の遊ぶ機会の減少，地域の子供への関心の希薄化などは，幼児の育ちへの影響が懸念される。このような状況を考慮して，幼児の発達における環境の意味や今後の園・家庭・地域のあり方について自ら考えたり調べたりして学習をしてみる。

環境のキーワード→出会う，感じる，気付く，発見する，好奇心をもつ，探究する，表現する

② 2点目は，環境構成に必要な季節に応じた環境作りをしていくためのきっかけになるように，毎回，理論の後，折り紙を折って興味関心をもつ。また，保育者としての技能を身につける。作品カード作りやミニ環境構成の壁面制作を作る。教材として活用できる年齢別折り紙や切り紙作り。保育者と幼児とともに作る環境構成の方法も学習させる。



写真 2 秋の歌の歌唱指導用



写真 3 秋の制作



写真 4 にらめっこのペーパーサート《乳児～幼児》

(4) 指導案の作成から

幼児の発達によって、教材の違いや同じ教材でも展開内容の違い、保育に必要な持続時間や集中する時間の違い等学び、幼児理解をして取り組む事の必要性を感じとらせる。自分やクラスメートの添削後の指導案を見て、教育実習や保育実習、就職後現場で活かせるように参考にして指導に役立てる。指導案を立てることで指導のねらい等明確化を図る。

- ・ 幼児の実態・・実態を把握する。家庭との連携を図る。
- ・ 幼児の生活する姿や家庭での様子、成育歴も配慮して幼児を理解する。
- ・ ねらいの設定・・幼児の姿から保育者が幼児理解の上に立ち、保育者の願いや見通しをもつ必要がある。どのような方向に育ててほしいのか。そのためにはどのような経験を積み重ねることが必要なのか。幼児を理解する上で長いスパンの中でとらえていくこと、具体的な指導計画や保育の実践、反省や評価のあり方も学んだ。

(5) 成果と課題

幼児期は感情と感覚を育てる時期である。そのためには、様々な経験をして感動体験を積み重ねていく必要がある。幼児期に必要な感性が育っていく。繊細な感覚をもち、大人から見れば些細なことでも驚いたり、喜んだりして、自分の思いを素直に表現できる子を「感性豊かである」「鋭い感性を持っている」と言われる。鋭い感性は新たな発見を導き、知的好奇心をかき立て主体的な環境への働きを促す。幼児にかかわる保育者こそが感性を磨く必要がある。感性が育ったかは目に見えるものではない。表情や行動から読みとるものである。幼児が物の出会いに「じっと見入る」という姿を逃さずに見ていく鋭い感性が要求される。学生達自らが今の時期から身近な環境に目を向け、環境の変化に敏感になる「環境を観る力」を日常から養い蓄えていくことが大切である。感性を磨き研鑽に努めたならば幼児理解につながる保育者になると考える。

指導計画 (部分保育・全日保育・研究保育)			
実習生氏名	指導者印	学級名・幼児数	観察 時間 20 名
年月日	2019年10月10日(木)	4	観察 20 名
幼児の姿	<p>自分の名前を呼ぶと手を挙げて「お名前を呼ぶ」という言葉に反応する。名前を呼ぶと手を挙げて「お名前を呼ぶ」という言葉に反応する。名前を呼ぶと手を挙げて「お名前を呼ぶ」という言葉に反応する。</p>		
ねらい	<p>「お名前を呼ぶ」という言葉に反応する。名前を呼ぶと手を挙げて「お名前を呼ぶ」という言葉に反応する。名前を呼ぶと手を挙げて「お名前を呼ぶ」という言葉に反応する。</p>		
内容	<p>名前を呼ぶと手を挙げて「お名前を呼ぶ」という言葉に反応する。名前を呼ぶと手を挙げて「お名前を呼ぶ」という言葉に反応する。名前を呼ぶと手を挙げて「お名前を呼ぶ」という言葉に反応する。</p>		
時間	環境構成	予想される幼児の活動	教師の援助・配慮
9:30		<ul style="list-style-type: none"> ・ 名前を呼ぶと手を挙げる。 ・ 名前を呼ぶと手を挙げる。 ・ 名前を呼ぶと手を挙げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 名前を呼ぶと手を挙げる。 ・ 名前を呼ぶと手を挙げる。 ・ 名前を呼ぶと手を挙げる。
9:33		<ul style="list-style-type: none"> ・ 名前を呼ぶと手を挙げる。 ・ 名前を呼ぶと手を挙げる。 ・ 名前を呼ぶと手を挙げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 名前を呼ぶと手を挙げる。 ・ 名前を呼ぶと手を挙げる。 ・ 名前を呼ぶと手を挙げる。

図 2 保育指導案

5. 保育内容・健康の授業を通して

(1) 保育内容・健康の意義

保育内容・健康では、心と体の健康は、相互に綿密な関連があることを踏まえ、幼児の健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養うために、領域「健康」の目標や乳幼児の健康な心と身体の発達を正しく理解し、健康で安全な生活が営めるようにするための保育のあり方や援助の仕方を学ぶことを目的としている。

(2) 授業内容

- ・ 発達年齢にふさわしい生活の中で、健康生活の基盤を身に付けるための保育について学び、指導案を作成する。
- ・ 実技演習を通して、運動遊びの実際について学ぶ。
- ・ 保育を行っていくための能力を身に付けるため、模擬保育を行う。その振り返りを行い、実践力を高める。

上記の3点を踏まえ、シラバスに添って、表4の通り授業を行った。

(3) 成果と課題

幼児を取り巻く環境についてのレポートから、学生は、集まって遊ぶ場が少なくなり、幼児にとって望ましくないと思われる環境についての課題意識をもっていることが分かった。幼児教育の現場がその役割を果たす重要な役目を担っていることのもと、幼稚園・保育所での遊びについて考えた。

幼児の運動発達の道筋に沿って、遊び・環境構成・援助のポイントを考えたり、具体的な事例やDVD視聴を通して幼児の姿を捉え、援助等をグループで話し合ったりしたことは、幼児理解について自分の見方を広げたようだ。

実技演習を通して、幼児の目線に立つ、体を動かすことで心が動くその心地よさを味わう、保育の流れや指導する際の配慮事項などについて学んだ。運動遊びは実際に体験することにより、感じ・学ぶ、を経験できる。

実技として、ヒゴと巻き段ボールを使って手回しゴマを作り、遊んだ。よく回るようになるためには、芯棒となるヒゴの長さ、段ボールの巻く量、回し方の工夫が必要である。友達と一緒に粘り強く試行錯誤する姿や回った時に味わった喜びは、幼児が遊びの中で何を学んでいるかを知ろうとする幼児理解につながると考える。

健康領域では運動遊びの他、基本的な生活習慣や食育、安全教育という視点で授業を行っている。食育指導のための「食品三群」の掲示物を作成した。幼児の興味を引く、分かりやすい、表現の仕方等の工夫が見られた。幼児の姿を思い浮かべ、指導方法を考えながら教材作りをすることの積み重ねは保育力向上につながる。保育実践力向上のための授業の進め方について、考察を続けたい。

表4 授業内容

第1回	オリエンテーション、健康領域で扱う内容、健康の意義について考える。 今の幼児たちを取り巻く環境（健康な生活から見た）について、どのように考えるかのレポート作成・提出する。
第2回	乳幼児の運動発達について理解するとともに、幼児期に育てる運動能力やその環境のあり方等について考える。
第3回	保育は幼児理解から始まることを踏まえ、0歳児からの年齢に応じた遊びの事例を通して幼児理解をはかる。DVD視聴を通しての幼児の姿から幼児の思いをどのように捉え援助しているかについて、グループ討議を行い、発表する。
第4回	長期指導計画、短期指導計画に基づき日々の指導があることを踏まえ、日案の作成について考え、実際に自分で作成する。また、評価のあり方、その重要性について理解し、そのサイクルが保育の質を高めるとともに保育者の指導力を高めることにもつながることに気付く。
第5回	実技演習第1回…体操、リズムに合わせて動く（歩く、走る、止まる、後ろけり、ケンパー、前けり等の基本的動き）、仲良し遊び、鬼ごっこ、パラバルーンで遊ぶ、等行う。保育現場で行う体を使った遊びを行い、体を通してその心地よさを味わうとともに、指導のポイントについて学ぶ。
第6回	運動遊びの実際について、事例やDVD視聴を通して見る。具体的に良いと思うこと、課題と思われることについて話し合う。
第7回	幼稚園教育要領に示されている保育者の役割について理解することを基本とし、体を動かして遊ぶ場面での役割や生活場面での役割について、具体的な場面を想定しながら学ぶ。体を動かすことが好きな幼児を育てることが幼児期の運動遊びのねらいであることを踏まえ、保育者が大切にしなければならない基本姿勢について学ぶ。
第8回	体を動かす遊びを主体的に進んで行う、多様な動きを楽しむといったことができるための環境について考える。
第9回	生活習慣の獲得について、発達に即して身に付けていく段階を捉えるとともに、幼児自ら身に付けようとする態度を育むための指導のあり方について考える。
第10回	実技演習第2回…フープを使って遊ぶ。縄遊びをする。体操、リズム遊びの模擬保育をグループで行い、振り返りをする。
第11回	現代の食生活の課題と食べ物への興味関心を育てるための保育のあり方について考える。また、指導に役立てるための掲示物を作成する。
第12回	安全な環境作りと安全に関する意識を育てる安全教育のあり方について学ぶ。
第13回	実技演習第3回…伝承遊び（コマ回し、羽根つき、かるた遊び、めんこ遊び等）巻き段ボールを使い、手回しゴマを作る。体操、リズム遊びの模擬保育をグループで行い、振り返りをする。
第14回	幼児がよく罹患する疾病について理解するとともに、救急対応について基本的な事柄について学ぶ。
第15回	幼児教育で育んだ健康領域にかかわる力が小学校教育にどのようにつながっていくのかを考える。配慮を要する幼児への対応や配慮すべきことについて考える。

6. 保育内容・表現Ⅱの授業を通して

(1) 保育内容・表現Ⅱの意義

幼児が感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊にするために、遊びの中で幼児が心豊かに育つことが必要である。そのためには、保育者の感性が問われる。幼児がイメージを広げ、伸び伸びと表現活動を楽しむためには保育者として、どのような援助や環境構成が大切かを学ぶことがこの授業の意義である

シラバスにおける科目目標及び到達目標（1）（2）において、将来、保育者となる学生にとって、どのような学びが保育実践に結びつき、保育者になった時に役立てることができるのかを考える必要がある。そのための授業内容および授業の展開の在り方を探り、今後の授業改善に生かしていく。

(2) 「お店ごっこ」の実践を通して

特に造形活動の基本となる第6回、8回、9回の授業の内容については、以下の通りである。

表5 授業内容

第6回	○身近な自然環境と表現 ①水・砂・土・石・動植物・野山・海・自然現象との出会いから、それを道具・原料・素材モチーフとして造形活動に活用
第8回	○身近な素材や用具 ①いろいろな紙（柔らかい紙・硬い紙・大きい紙） ②描画材との出会い（クレヨン・パス・パステル・ペン・水彩絵の具・版画・粘土・その他の素材） ③用具を知る（描くための用具・切るための用具・材料を変化させる用具）
第9回	○遊びから行事へ（作品展への展開） ①子どもの興味・関心から作品展に向かう展開について（A幼稚園の実践から） 『廃材の作品作りからお店ごっこへ』 『忍者ごっこから忍者の修行場づくりへ』

(3) 実践を通しての学生の考察

① 講義についての理解度（いろいろな素材を使った製作活動）

- ・ アイスクリーム製作では、すずらんテープを使うと光沢が出てアイスクリームらしくなった。
- ・ 実際に作って見ながら試行錯誤することで良いものができた。
- ・ どのようにすれば本物に近づけるか考える事で、いろいろな素材を知ることができた。
- ・ 『お店屋さんごっこ』は客という相手があり、お客に喜ばれ、たくさん買いに来て欲しいという思いから、良いものを作ろうと言う気持ちにつながり、身近な物を使って、どのように表現するかという工夫する力と技術が身に付いたと思う。
- ・ どのような素材を使うべきか子どもが気づくためには、保育者がいろいろな素材を用意することが大切だとわかった。
- ・ より本物を目指し、試行錯誤することで、学生同士が相談し、いろいろな考え方やアイデアが出された。

② 他の領域とのつながり

表6 保育内容「表現Ⅱ」と他の領域とのつながり

健康	・ 指先を使ったり、安全にハサミやカッターを使用したりする ・ 食べ物の店なので具材を知り、食に興味をもつ ・ 自ら進んで活動に参加できるという事は、身の回りの知っている店、目で見て分かりやすい活動など活動が具体的であった ・ 知っている事など活動が具体的であることが、自ら進んで活動に参加できる
人間関係	・ 友だちと一緒に考えたり、作ったりして協力して商品を作る楽しさを知る ・ 役割分担し効率よく活動を進め責任をもってやり遂げる ・ 友だちと関わる中で、異なる考え方があることに気付き、自分の考えをより良いものに変えていこうとする ・ 店ごっこのルールを守る
環境	・ 金魚すくいの水槽、すし屋のカウンター、レジスターなど身近なお店の仕組みを真似る ・ トング、トレーなど店に必要な道具を知る ・ 本物に近づくために、素材選びを考えたり、試したり工夫したりする ・ 店の様子、果物の形、野菜の形などを観察する
言葉	・ お店の環境、品物のイメージを作る過程でのグループ内での話し合いで自分の考えを友達に伝える ・ お店の専門用語を知り、店員とお客とのやりとりの中で、日常的な言葉を使う ・ 看板、メニュー、金額などで文字や数字に興味をもつ ・ 商品の品数を増やしお客に選択させることで対話が増える
表現	・ 身近な物の形や色、手触りを真似して、別の素材で見立てて商品表現する ・ お客さんと店員のそれぞれの役を演じる

(4) 成果と課題

幼児の造形活動で基本的な知識は講義の後に実技を行うことが、より確かな学びにつながるのではないかと考える。保育者となる学生は教材を自分で準備し子ども達に提供していくことになる。日頃

から教材収集したり，教材を効果的に使用したりすることができるよう意識付けをしていく必要がある。「お店ごっこ」の実践で年齢に応じた活動を設定することで，造形活動における子どもの発達を捉えられる内容も検討していく。今回はシラバスの内容を基礎編から抜粋したが，保育内容・表現Ⅱのすべての授業内容において理論と実践をうまく絡み合わせ，生きた学びとなるように授業の在り方を模索する。



写真5 『お店のルールを守る』
1回10秒の金魚すくい



写真6 『店ごっこのまとめ』

7. 保育指導法（遊びと指導）の授業を通して

（1）保育指導法の意義

幼児は，遊びを通して，試行錯誤しながらいろいろな体験をして学んでいく。幼児期に多様な遊びを体験することは，幼児の心身の発達を促し，様々な諸能力が互いに関連し合い総合的な発達へとつながっていく。そのことを学んでいくことがこの授業の意義である。それは，幼児理解にもつながっていくことである。

授業内容を次のように設定した。①保育の基本と遊びの意義について，②遊びを通しての指導，③保育実践における遊びの指導，という観点から，理論，教材研究，遊具作製，保育指導案作成，演習，模擬保育等を通じて学ぶものとして15回の授業を実施した。

（2）模擬保育「手遊び」から

前述，1）に記した③保育実践における遊びの指導の授業として，「手遊び」の授業を行った。「手遊び」は，手や指を動かして遊ぶことで脳への刺激となる。また，軽快なリズムや歌など音楽的要素も多く，からだを動かすことでリズム感や敏しょう性の発達にもつながる。生まれたての赤ちゃんは，目と目を合わせ，名前を呼んで優しく話しかけてもらうことで，すでに最初の遊びが始まっている。そして，保育者と子どもと1対1で向き合って楽しむことを積み重ねていくことで，幼児期には友達同士でも触れ合いながら遊びを楽しむことができるようになる。「手遊び」の模擬保育の授業を通して，「手遊び」が児童文化の1つであり，子どもにとって身近な楽しい遊びであることを理解し，さらに「手遊び」を楽しみながら子どもの学びにつながっているという保育の視点について学ぶ機会とした。

授業の進め方として，手遊びや保育指導計画立案についての講義を行った後，短期大学部1年生2クラス合同授業，A・B組64名，C・D組63名のため，1グループ7～8人とし，各グループで「対象年齢・幼児の実態」を想定し，保育指導案を作成した。その後，子どもの前で指導することを想定

して手の動かし方やテンポ等に気をつけながら演習を行い、グループ外の学生を子ども役に見立てて、「手遊び」の模擬保育を行った。

① 模擬保育の活動

各グループで、子どもの年齢に合わせて選択した手遊びを発表し合い、みんなで手遊びを行った。最初は、前に立つことを恥ずかしそうにしていた学生もいた。しかし、手遊びを進めるうちに、相手が分かりやすいように声や動作を大きくし、楽しい雰囲気できるように笑顔でしようとしたりする姿が見られるようになった。

表7 模擬保育(手遊び)の内容

≪ 3歳児対象 ≫
「はじまるよ」「トントントントンひげじいさん」「かみなりどんがやってきた」
「あたまかたひざぼん」「手をたたきましょう」
≪ 4歳児対象 ≫
「はじまるよ」「おべんとうぼこ」「トントントントンひげじいさん」
「トントントントンひげじいさん・アンパンマンバージョン」「線路は続くよどこまでも」
≪ 4、5歳児対象 ≫
「パプリカ」「やきいもじゃんけん」「3びきのこぶた」「アルプス三万尺」

② 模擬保育終了後の考察

手遊びの模擬保育終了後、「手遊びをして難しいと感じたこと」「保育者の援助や配慮について」「気付いたこと」を振り返る課題に取り組んだ(表8参照)。



写真7 模擬保育(手遊び)

表8 模擬保育からの学び

① 手遊びをして難しいと感じたこと
・リズムが速く、テンポについていきにくく、リズムに合わせてするところ
・手が交差したり、手と足の使い方のタイミングを合わせたりするところ
・右手から始まるのか左手から始まるのかを覚えるところ
・テンポが速くなると難しい
② 保育者の援助や配慮について
・最初はゆっくりと分かりやすく進め、伝わりにくい動きはゆっくり丁寧は何回もする
・指であらわしにくい子どもには声掛けをしながらできるようにする
・子どもが分かりやすいように、保育者が動きを大きくリズムカルに進める
・みんなができていくか確かめながら進め、保育者が明るい笑顔で楽しんでいる
・ストーリーや言葉の意味を知らせることで曲に親しめるようにする
・より発展して楽しくできるように、子どもたちにも考えさせる
③ 気付いたこと
・繰り返し行うことでみんなが一体感をもち、より楽しくなる
・単調に進めるのではなく、ゆっくりしたり早くしたりすることで楽しさが増す
・みんなができていくか確かめながら声掛けすることが大切である
・子どもの年齢や季節などに合うように、曲や手の動かし方等を考えないといけない
・きざみしょうがやふきは、今の子どもに伝わりにくい。
・サンドウィッチバージョンもあるので、歌詞が伝わらなかつたら、臨機応変に変えても良い（おべんとうばこ）
・人によって動きが違うため、始める前に保育者同士で確認しておくことが必要である（トントントントンひげいさん・パブリカ・やさいもじゃんけん）
・手遊びをしながら数が理解できる（はじまるよ）
・体の部分の名前を知ることができる（あたまかたひざぼん）
・手遊びから、雷の自然現象を知ることが出来る。「ドンドコドン」と太鼓の音と合わせて楽しめる（かみなりどんがやってきた）
・体全体を使って踊ることができるため、体の健康につながり、運動能力があがる
・実際に子どもの前でしてみたいと思った

(3) 成果と課題

模擬保育終了後の学生の考察より、保育者自身が教材をよく理解していること、楽しい雰囲気を出すこと、大きく分かりやすく動いたり歌ったりすること、子どもの実態に合わせて教材を考えること等、子どもの前で保育を行う際の保育者の援助や配慮の大切さを捉えていることが感じられた。手遊びを楽しむだけでなく、そこから数の認識、言葉の獲得、運動能力の発達等、何が育っているのかも感じ取っている。年齢や発達に応じた教材の大切さや子どもの前でするためには教材研究が必要であることも、学生の学びとなっている。また、子どもの前で実際にやってみたいと思う学生がいたのは、保育者として子どもを理解したいという気持ちの表れだと考える。

しかし、数人のグループで行ったため、一人一人の学生が十分に教材を理解し、責任をもって指導できるまでには至らなかったことが課題である。

今後も、子どもの実態に寄り添い、どのように保育を展開することが必要なのか、実践者としての保育力を高めていけるように授業を展開していきたい。

8. 今後に向けて

授業担当教員は、全員、幼稚園の園長経験者である。現場経験を活かし、学生に伝えたいことを協議していく中で、やはり、幼児理解が保育の出発であることを伝えていくこと、幼児理解を学生に意識させながら授業を構築していくことを確認し合った。共有することで、担当者にとっても多くの学びがあった。授業の中での情報交換、意見交換など、担当者それぞれの立場で、工夫し、得たことを共有する時間をもつことができた。共有することで、授業の進め方を検討し資料などがプラスされ、学生の幼児理解の力につながっていくことを目指していった。

講義の中での学びに、具体的な写真、DVD、現場の話が入ると、学生の聞く態度が変わっていく。

学生は、現場の話からイメージをもちやすいことは、どの担当者からも出た意見である。学生は具体的な話からより真剣に、楽しんだり考えたり、グループ討議が広がったりしていった。学生がめざす保育者像が、授業を通してイメージとして描くことができていくことが、幼児理解につながっていく。

担当教員の協議の中で、教員が学生の気付きや意見にうなずき、共感していくと、より学生たちの発言が増え、いろいろなことに気付き、保育の考え方、幼児の捉え方に意欲的になっていく傾向が伝わってきたことを確認した。教員が学生の気付き、学びに共感していくことの重要性を痛感した。

文部科学省から、「幼児理解を極める」(2016. 3)が刊行された。幼児を理解するとは、「幼児の生活する姿から、その幼児の心の世界を推測する」「推測したことを基にかかわってみる」「かかわりを通して幼児の反応から新しいことを推測する」と記されている。授業では幼児の姿が推測できるように子どもの心もちに触れる喜び、子どもと共に生きる喜びを学生と味わう授業をめざしていきたい。アンケートに「専門的な学びをしていくうちに、幼児理解が分かってくると思うという学生の率直な気持ち」を受けて、現場経験者の担当者たちが、現場の声、子どもの姿、保護者の思いを伝えていき、学生の気付き、学びに共感しながら、互いの思いが行き交う授業の大切さを担当教員が再確認した。

今回、授業実践をまとめるにあたって、情報を得ることができ、互いに刺激になった。意識して、交流の機会をもつことが必要である。

課題としては、担当者が話し合う時間を確保していくこと、授業内での情報をさらに意識して交換していくことである。互いに担当者の願い、授業内容を具体的に知ること、学生の様子を知ることながいかに重要なことかを共有する機会となった。今後も授業や学生の情報を共有していくことに努めたい。

参考文献

- (1) 小田豊・中坪史典編著『幼児理解からはじまる保育・幼児教育方法』建帛社, 2009.
- (2) 文部科学省『幼稚園教育要領』フレーベル館, 2017.
- (3) 厚生労働省『保育所保育指針』フレーベル館, 2017.
- (4) 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』フレーベル館, 2017.
- (5) 槇英子『保育をひらく造形表現』萌文書林, 2018.
- (6) 勅使千鶴『子どもの発達とあそびの指導』ひとなる書房, 1999.
- (7) 川邊貴子『遊びを中心とした保育』萌文書林, 2005.
- (8) 木村鈴代編集『新・たのしい子どものうたあそび』同文書院, 2014.
- (9) 久富陽子編著『幼稚園・保育所 指導計画の考え方・たて方』萌文書林, 2009.
- (10) 文部科学省『幼児理解を極める』, 2016.
- (11) 文部科学省『幼児理解に基づいた評価』, 2019.
- (12) DVD『乳幼児の発達と保育』VOL.3 3歳児・4歳児・5歳児 原案監修 大橋喜美子